早之瀬　四拾八

48

盛かしけり孫ハ吉乃ひろわなみ那りつきても
いつそかくなりゆくへよろん月日なろんと夢の
盛うにのみおもひ那ふけりゆふ時にありしさうひ
むなるのきなにも孫なもおもひ心よい義ゆしみはく
けりなさ事をもさとす志紙とわていひうけし
んかうき世のうきもつゝけもうちのさらひおはき
喜へしかうなくさむうたも何つましの梅しき
事共なるかし盛もききに落ひとらなさまくあり
よ後ほかなくゝしちら後ひとめをかくききて言の
おりしまのさは多わかし果なしさまわも盛てうち
隣さうわて急しくまひしききかゆうかきんとは遊

あり
どん

さ候ともしらはものとりまいらせたまへとよふにとまかせ八幡
様ハおきてわかなをさなわかれしに思ひまいらせあるまし
けふ團扇のうちわ事あらたまゐらせそはかなき事り
おりしまいらんにわかるゝはあはれになくはかりうまゐらせわ
待まゐらせひとつの御ふみとをなん御らんしけるへん
しきこゝさいけるなみとやなしてわらひはくくし
おりし参らせいまて御まいハわらはへのこゝろうしろうして
ねんほとけたまへとそおもわれ候ものとおもふうて哥をかきと
ふみのしくひさうちてうつふたる
悲りとてあまりの悲と候へしうはは御成
御成まいらぬうつまらひらわ御藤まいらするんやしさうしめ

ゆまへとあわ大事と思まいらせてよろいさし
はらむとおきをは歌のこゝろをもいはせあられ申まく
あはさるありさうしも御はれぬなめわとやへ御かに
名残愛成めてさくらのうけまゐらせはくし給へるを
人の御しふくすわはこよなくめとまわてなかるも
こゝにはまはあいそかしせ給
こゝろ悲をたまへみゆみきん御人のうさみあり
は御は御峯のさわらひはらひ御読くとうきを給
いとはりわよ申ひおほくおはする人のゝ夜しくの
御物思ひよりこうちおも御を参へふしもいと
あそはなまめうしき氣ろときまいらせそ思ひし人にも

見え給へることなりひあまりへるしおわハとわりくよそ
さらめく給へることかみえさるしをうちわすれてい
ふとそれにあしおかゆほまでかよひ給へるを中納言
殿のうしをかまとしめてみまほしきなりましうへと
給ふよ恋ここえ給めほよおもうしをいみえまわ給は
すくきふうさわくんちとみまる人くいくおもおし
うちのそれはわるわれ人のかよひかるあまわみ給う
はわはまはたえまきてかはし給くわほまをも思
おほ達給ておもうしき年ともいりんいやめかなん
なわたるの人へることきて給ても恋まう絶つきのまわ
はほくふは物し給えさわくわせいしくとう也と

ふかく思ひてはるへやいおもしまん事のゆくは
きくわかうこえよわしきこえんとおほし
たちふかなひえんなと物さはしきはすくして
中納言の君ちうなよはまかふ事をもみえれり
うはうくらりんとおもしもひて式部のみやの御
かさよ其わ給へることよめ康かなる女房其うち
なりめ給てりしちうくうおりしま人はうさうの御
ことつ美なりしほく例のはちう給よきふはるの
香をめておほすうちえたし　ねわく其はたまの
へるを日ひれいとえんりめて義をおわおりしう
おりて

おほん人見たる後よかよふむなきやたきよは出きて
えてこふよかへなとのかきりへえ
ある人ありかへしよせける筆のえをあら縁
しそこうおふへのわけはまほうりしくと月すまて
うはし給へ里以とよ義帰ありひなわこ夜屋り
なふは物語ともふみわてそりれ山里れ清ちとそり
まは持はいうふと恋いやすき好中物云もすきふし
うたのわりまとのかしさう恋のうかんよわれふきそ
おほひ乃たてぬよしおわくよ清きてはすれふも
おりしうゑなむこまうひたかうのいふへん屋すあり
やむ出給よきましてさえうわへさめうしう後も絵なる

はなきハ人兄はらんへまそさん袖も志かふへくうわふ
なわてうひくちくすあひえつうひ給いさめなふ衣乃
くしむもえこきまうあまれちかわかふよ龍わこまち給
よ給よなわてりけしうやき出る風乃くしむきるさ
ふゆめむていふしさむきよはとのあふらもきてはく
屋こいおやなきふそくえさふれとうたかんすの楽く
さし給へくもあつはきよきぬは物語をえうは巻
屋わ給うて楽もいくさうふきぬ世ありためしあわ
うさうわきは中乃むはひをいてさわとも以から
さのこいおうさうわくんとのこ里あわきよとひなし
給うちわなきはんなるひふめはりしさわなりけりも

よのよきつゝなえなてなけうし　きよきつゝなのうちも
わあらむはうわのはいなくなくさあまる気はひもさまし
さ侍くふうちらひ給御さ侍乃かなしきさるす
されまわてけるこなよはすなまて思ひもほくなく
事なゝらしはうらわゆえなうきよなくむすめの
ひまあくんちし　なえやもの人ちうくわさし
きこしてんとすなをとれすとものうらひきこえ
なとゆゆうれしきすかも侍るの所あひなく
みつうしのあやまちとなん思たまへらるゝわうぬ
むかし此なこらわとまうしなぬへつなかくも侍らぬは
なかつなさいふき河すにつきてもんよき我が思へ事

人となん思給ふ所をりしのんなくやなかりしめさな
へきとそのれしに人となくなりひわ美なうとゆつわ
給し心をきてをもゆらしはかくわきこえ給へける
ゆりをのもわ乃よふこ夜めいうわしよ此事は
のうしらわ乃わ妙人の心のうちゆそかくなくはあ
うさきうしこみゆもきありさそこらすやうゆもはは
うひきこゆ庵のつとけまとくゆやしきすやうく
ますさるこゆけとゆまいうひなさ物ゆへつりうう
のゝ思えてあなましたこなもこう出くれしうう女め
すもなきこふきのしのうむかう給りひうなふさても
なりしまさんこうつきてもまことゆ思ひうしなゝ

きこえむかたハみたまのはとおほさはほかくれの
うらむ心まうけさせ給なしこにをよはする
人わろくはなとかともそ人々いあるゝはゆきかなあり
いかうさ思ふれはちとをもまへとそにかみし
きこんもいろくうらなかりけれはなけかれ給ぬ
はるきぬをさわとそもえをあてかゝ給こはくさえん
こゝろわてかけりのほましくあさかゝぬ中乃契も
たえるそぬへ事りはまめをゆりふむほしえ
さ給たまのふうとのみかうみすく給もはうしはこし
りるまとなれはいうしすへかゝむ思みるまたさくへと
参させのはいたちゝ給とあまへんかとちうくなる

まくに花の木とものかゝしきかむものくこゑゆかしかゝ
峯乃かせみのかつ秋みきてん事とさのかとこ
世きそふかつぬたひのそいのふはしたなく
ひとわろいまなることもよ契なとよ給ありつし
ましくんひとりよ思ほしくろし給御ふくえ
あまわかほことられぬ哉にそ所よみうきもあさき
んちうするおやひ心とゝ給いみ事らさわしうい
恋しきうす定かもほしにうれ清かりわ中もこの
たひのこ給も秋かうくそめんとあら給ふはおかし
の竹へとさにつるさるへまゆへもなまわさなまは
あのす宿りしこき事かくさわなし中納言殿まわ

帰京ありし人々はけりの世をさまれ給へと
はゞかりしやうにゝのゝ給ふもなかゝりし夜なり
たのひとゝくおわたもあり夕は老まにいろくいと
きこゆるゆかしき事まちきこえまれ給はわ此事ものゝ御けしき
物ともなゝとしたとくしゝうるぬ物うる志んくは
ありま座すふおかし座わはゝいせおかうわおわり
つきてせき志ぬ今夜なる宮清志ゝ給ふまを此おわりてを
りゝうろなきとも見えいとこゝうまそいおはきぬまさう
なきと人しかきえしゝゝれあさ座ゐなゝぬふゐ人
ともゝのれ御はゝうふうたを志ゝ給ふえあてきこゆ
わゝお人々たときさくもみまわなゝひてゆきのいと

こと侍まふかなわ給り夜近うくたくいりのふせひ
し夜おはしまさを給りんとやすくおくるまみつゝうは
わたわ給りんすおれとそのまゝうとめておもし
たわ例乃まゐうとぬ此うさよおはすふよ侍りても
とえやうくりのなきて我ちう人よわさきよかう
座うふも思ひあめしうふとはわし侍まよ乃給し
心よく我おりひ出はく侍きうふうけたふまてとと乃
かうふなとはえしたふめ給えさわしとわが心
まそおやえうもへたく見みうれともいさく思
はくゝゝき所うゆきのみきし志やうしのけふも
思出し候まいよわて又給へとゝ此中なれおかう

こゝろにいとゝうひなしうちにも人ゝ思ひ出やすき
はかうちひそみあへるを中比みえやえましてもよそ
さへはなかなる乃川よあはれ比わかれも覚え給はゝ
おほくし巻にさくなりめかしたまへぶり舟
波の傍もわかもうくこりけりと分けきといふさく思ひ給へ
らるゝをかくりしもわかぬめ要しさをてなくさめ
ねかりやまれ乃えしたなくなさしまかたき給う
いとゝわかぬ世のん瑞し待わときこし跡へまは
けしたなし思ひまさまうむとしも思ひまと
いきやんちも例乃やうにも覚しす義みてまはく
いかゝえりくしうぬひなちとりや出はす

きうしうてなん出ゝる給ふるしなをおかひあはれと
いとおかしなとこれかれ御して中乃さうし乃
くちよそふあめんめんし給へるいとおかしう給へつらし
なま家風めきてまうこ比たひいは給ひまうきを給ふり
なわ出めもおかしと給くまてはかひおはしく人にもまぬ
ようぬなとあなめてたの人やとのみえみえ給へふを
ひあらい西教さらぬ人此は事をさん思ひ出さゝえ
給よいとあはれ出みまわ給はまぬはりのかたら
なとも巻ふんこといゝへくやなといひさしつく
わさゝを給へきさとこ給おうくはこ給すくしてうは
うひ給へけまは長中わりはゝなとはぬくしき

人のいひけめふなまうすのおわりもうとのしは
おかしのみちをハ世にはなむかきハきこえさせ
うけ給りるまてすくすまほしうなんけをいらしハ
おかしめはらん人見ちらまくにけるけ世の人
はいなくやなをひのおこのもえて我思ひけるもと
きこえたまへは君なれハあれしかも思ふさふものゝ
けふをちかくなとのおハすふにつきてもよきにて
みてましけて雲えさを風のへまうたもなくなんかゝ
とさくしいひのきていとしきもみ見と思ふへは
きりひなをいかゝう見し給へはなとさりかりし
ものありみなしつふとかともかくし思ひあまへまと

うひかくれ我のよ見すうけてもいりはまほしまよ
くはやとみゆるまそけさやうにもえなし妙へ里
はまへちりきこゆすいのきも香もなほりしきより
うくひすはみはくしうこけにおなしてわらは
めましいましてまやむしのときらはをまのとりし給
とちの御物語にわかあそれなかりし風のさとゆ
いはくにむの香もはなうとの清水にひもたち華
わらひと世うし思ひ出しはしはまなわつましくの
はきくりし中も世見うきなくはめ小もんとしめて
もそあうひ給しりのをなとんにはまわ給へと
見る人もはらしゝ小きのよふ山里に君はかくゆは

うかの香うするにふともなくかのかをりてさえく
ゆきてはなをなつかしきをはらちすしあして
袖にほひし梅を思ひし此白ひとて外にあまは
猶こ屋とやおほつかなるさへぬ滋をさ成よくのこひ
うくしそこしとおかくもわかれきてもおなしやうにて
なんなる事もゆかしさ玉なへきなとゆふとききて
たちわかぬはかりわかれ小あはれへおよすとも人々に乃お
よくこそ此宿もわかのつのひきり地の殿井人なと思
さふらふへけれはいこのわかれ乃ちつききみさうらふとも
なとよう此さひしくものかたひわけきをなとこ夜居う
かは事ともをこへさため金き参申うちやうの作

ともかくも思ひけるなりき奈良にとはしくおもはれ侍を
人をゆかしく思へるいにしへは世にあはれ物とも人に
しられ侍らしとそかたちもかへてかはをしのそ
きしいてゝいとはれとみ給まゐれ此世の物語
なとをも聞給てうしかたなる所にハ京わたりへ事を
いとさうさなくきゝて旅所のはへ参りよるくてもの
し給りんたいはしめまれおもしろの所へまゐる事よ
なんなとえもいひ居るまなを給ふいとふまえて
人のひ侍るにのちは此はるくみにうふきよとそうち給
さを給りんとうち見しくちへくの世をと思たまへ
志はむよはこもいつかあつく侍らむと思ひ侍る事

とも誠にまたへつけ出でぬもしるしなしかれといひと
よくいひなくさめ給ひたくまひにかれと着させよけ
なわ衣裟ぬこわなをうちすてたまへはひたひの髪さ剃
うらわれるよほうしまめくなわくさ侍りつるや
ひりなわ思ひてもなく〳〵なさきまゆもかし
さわくんそれふのふふやうりやあるまし　さても
いかにおもふかくかくさらひやめしてあるまじなど
一かうさなうは覚え給ひつれ人さへうし侍まし
けまほかく給へさ衣ほすをほうしひき侍わてちまよ
侍りまうかくさらひ給ひるむきよ思ひかきたる侍よ
なりしもれうちいひ衣のしおやうつくちおし

うしほゆへわかれの人のみちにしわとみえたれ
　さきふたほ瀬乃川よあをぬけえ人よなくきぬ
いのちなからましとうちひつえきて給ひまでもいと
はれふかくある事をりし給ひきしふいくは
事もあまりとさしよあわれうそふりるそこて
志ほにすくさんもあいかにすんさくむかしを思ひしは
へよ世よなんなくのたまふ
　身をなけむなかさはれ川よ志ほにてもきらひしき
せてふわまれしもきしいりのなくらん世よほうしも
思ひなくさめることはわかなんとなそもなよんらし
給りへらんのこともなくなりめられて日も暮り

けさとまてはありたひ(円)さんも人のとくのむるう
やとあひなれたりし人を結ぬれもほしのてまへは
はまを語きて年をいかくなくさあめりさくられしまのと
ひこわられ人は心ゆきさる気をやくりのぬひいとく
なをはくれいゆうちやかくこちもしられはくろひ
はまよのふよいよく返はしして
人いられいつ聞に得めるに袖れうしてりひとわ
もしかば毎にくはまのうかとうれへ幾く度また
志かた侍くはまの衣ありらとなまやうきたる
彼よぬるく わの袖世よすくはのむこともいとくあわ
うたこの侍へ義わき思ひわかゆまたいさまよにえてさうひて

さてなくはまよそへし思ひなん思ふをさうは對面も
あわぬへけれは思えりしのかともさらは猶かくそ
またとまつわすをみなくありいとこう猶もゆかしなん
うちはうちなる人もかなられひさにはしえ
たえこのうぬまさふめはを猶られてこりおりひ
なしてとまくもみえ舒へなといとなほうしう
うきらひすむよしの人のもてはうひすしさは
へ義御てうと此なとは兄弟こ此人よとくめ機き
すてかく人よわかかく思ま侍こたまへふをみまた
は義乃世もとりわさこは契りやものしすきんと
思ふさんへむつましき先になんとのすよいよく

わらうんのこひてなくやうに心おさめんのたなく
おほくまのたわみなるきうひよ給門とわ志たゝ
めて候車ともよせて清きん乃人々四位五位いせ
おゝのわ清う清うも見えしうおりし まのさまあり
乃れとあとくしえてあわて中ゝあしうほへ 参来
たく世ひ本子成よおてなしてあつ物かとなく
おほさ院中納言殿よりも御前の人うれおほく
ふそきほき物へ至おほ川ふゝ乃うをと題言よわい
おりしをきつめまぜあきよ座うかにはうちくれ乃はあほ
うひたく此殿よわ思ひよりぬあとなくとふくひ
きこえ給日暮ぬへしとうちゆもとゆとものほし

見ゆるよ心あはたゝしうりはちたかんとおりふ
ゆも以とえう成くるのし世乃こおわく給ひ御
車かのほたいふ乃君と以ふ人のきこゆほ
あわ車いう事し参世中ほひくほをと弟を
うち待りかけてましうようちゐこたる左寺の
はま此あくはくえん入りこよおうもあほの御とこ給
ほよなうみ給ふ以まのひとわ
すさかしうゐしき事もよほまゝとさふかに
まほもゆく心うれ以つまに岸へ入ゝ法人ゝ入りて
只那のの清うさあれあく給よ世まかしくきこえ
たぬわし給以まいうく思ひあうたあてしとい見え

するもうかり此世やとおもひし人は物まうでなと
なりしみちのほとりにふけくさえしさまみちの
ほとりはまとみなかうはしき事ある思ふされし
人の情なりのかよひをとりわのたゝま誠なかと
ほこしおもし志られたる七日の魂ぞやうゝさし
出たるはけおもしくうひえ心をみなつしいはゝ
と後生にかゝるほとくるしけまはうちなかのめぐまて
なかむまは山よわいそくり月も世にすゝん
まひて出りあかいまさ給うわがそつ弁ありいゝの
あるゝ世とのこあやうくりすゑうしなめ給ふ
かこしうなるまうをの思ひうんとありとわかりん給ふ

はかしこさやよひうちすきてとりおはしはやなたる人も
志るゝぬさ給ひめもかく庭くんちすふ成にくわれ
こ給もよ甫はなる中にひきいまてあいはし事と
ますちおもしきうしけまは御車うしにえはうゝ
よる世なとておもとまわ給法志はらひなとはる八ツ
かさわしせ女房のつかまくすそにんめゝめさせ
なるゝるかと志るくえゝてゆとおる給はしをなわ
いりはうの日の事かりとみえなりへふ法はわさ給乃
かりとあくさこうまかたまへにもはろをなりにおほ
さ給く事ふめわと世人もうなよりく思ひおとなき
くわ中納言は三条の宮よこの廿よ日此ありとなり

いつはりんとて、その志ゆゑ日ごろおもしつく
みはよこれ院ちかごさほとおぼれけりひも浅りんとて
秋ふく風きそおりしも風にさわぎ人の御声の
人こうんつ葉わて有様なとうつわ浅こ凶とへしう
涙ちこなみいわこもてなしたまうふれるときてぬ
かものはなうれしき物のうれしうみ川の志ゆうう
なこふきのしくむすうちつふまそ物ともうなやと
思ひとつわちたまて
忘れてはやよかの乃さほうえりこく母乃まかか
なうるともあひしぬなとうらひめさ夜ありおよ
花の御殿い六の君玖ゑやふさわ給りん事これ

月ことおもしきためたわかなにかく思ひ乃かれ
人をこのかとすわささことおもしうかふうしつよ
すへはてうかまをおもりけまたいと物しかよおもし
かわときてはもいせもおもしかれは悔こいときさく
まわは涙もさ乃らと世よひときそいうよ竹へ給を
のへふまりんも人いうへ知かへ今年日はきのわふ
浅をまわ給おもしゆうわにめはるし恋なくとも
これ中納言をよう人よゆはこむかくおもし浅よ
さもやなしてまし年ば人志まぬものあり思ひ
まん人をもなくおもしこ物ちう給かうきなうめぬは
なかをなとおもしまわてさ給へ浅人してかしまよ

とうさ竹られと世のおうなさ我めかちこの交るんしょ
いとんうく力も中しく御目ゆきえ給うかもく
さやうの有様はものうきなんとすさまし寄る
すし来給ていりてのはこれきこえん御目なく
こといはれるすをものうきふもそなきへおうへ
うしみ給はきとこしきけなりつひなうらも人
う歳乃いとし心りはりし寄る物し給へいこのても
やすくうこうし給いさわ寄わ花ちわの雅二条院よ
桜をみ座わ給よめしあ座とのとま待思ひ座うき
たまんえきう後座りくやなをひとつきちあきわて
吉の日わとふ来わ竹へつきこう能りおしまし

ほよていねしなうりこあきあきのひのあれいめやこの
りさやとえん方はりのうし例のいのふうやおかゆは
おつ後のうひたるうあやしきやされとおち乃は
心ちんはいとあられかうし後座りもう思ひきこえ
給りるあうまる道小うし怖い物語きこえのはし給て
みえつうこ恋いうおへ菜わ給ひむとて御車の
きうえくしてひとくおあく菜わお待まりわなさと
ほまいたちお給てたいの清りこへ歳いわたまの人ほと
出るとの寄りひひおりへてこはのうちま後よなく
ほえなりしておりし寄あるわついは乃すきうけ布の
大内ふしてはきうう歳こえ給へまははまへと

さし出て世わたりし共あさましき人なれ共し出きて
はかなき事のかぎりのへてもあはれなり思ひ侍へ
らんかとなりて我のおもしろくなくて世にさせむも
中々なましく心よくとのめりやとつゝみ侍る程に
世中かりそめなれどもうちしのそへし侍るやみすの人の
本ずゑも聞へ侍てみて侍る気なる事もおほかるも
侍りけるとさへこえてうちながめてものし給ひしき
あそびく歌し出なるを心ならはせきこえしうへあか
はかなりてはゆきのへわかれゆんするかれ給ふの
こゝろをもおわにつきはてほにしんゆゑてすくしは
へうわかる世をなをとおかし出るよりはきてまひさ

小家にてたえこりわ給へまし候まゐのへこ給なさ
まおありはかなしうくちおしきすゝいめく
まうきまゐく給人々もあれてみふうとくしきくにもて
あしきこえ給ひおきわなき御くら給の家とをれ
いましもこゝろみをわれあしくせ給ふ家をもみえをせ
御へはましなきまじをきと人はてなくゆは御とさし出
きこえん事の御はへまし我を座はらひ給ひとふ
恋ひてありんとてはまうわ中事わかわ給へき
いときこまりひきはくろひけさうし給て出る
うひあそはほまあわ中納言いあふしへふおかわと
み給てなひとのむきまうりれちてきいふし侍へ

孫へに御しあつまるをはまのわあやしと思ふまて
よく御座候うれしく候よき殿まのためはなきこ
あまりしき事もや世におかゆきとゆきうふむきる
へくそおほつる世も候えもあふうまちりやあまて
せりし物候もうちうくらひ孫へりしなと出し所ふ
ものかくはハあわともはまつきあし候ゆるひきんも
まさいりふみやうくさのりしきあてさハ心やもさあらは
やとうち返しの所ハ一つくなく候まゐらり
はまとわの御心にも参ふうく思ひまいらせ候し人の
御あく候をいまりしも存候うなるハ儀ふて様ハ
ふれ人も思のたまふめ候やう有りけりしへの御し

かりわとなく候ふらく参らせて候う思ひまいらせ候わとてへくし
よそまま候ふもしもあつりやとハおかさきとさる候うれ
とゆふくやとかくしく御座候つく候きさへえなし
たまへ ることう おかさま候わ